

花火

太宰治

青空文庫

昭和のはじめ、東京の一家庭に起つた異常な事件である。四谷^{よつや}区某町某番地に、鶴見仙之助というやや高名の洋画家がいた。その頃すでに五十歳を越えていた。東京の医者の子であつたが、若い頃フランスに渡り、ルノアルという巨匠に師事して洋画を学び、帰朝して日本の画壇に於いて、かなりの地位を得る事が出来た。夫人は陸奥^{むつ}の産である。教育者の家に生れて、父が転任を命じられる度毎に、一家も共に移転して諸方を歩いた。その父が東京のドイツ語学校の主事として栄転して来たのは、夫人の十七歳の春であつた。間もなく、世話する人があつて、新帰朝の仙之助氏と結婚した。一男一女をもうけた。勝治と、節子である。その事件

のおこつた時は、勝治二十三歳、節子十九歳の盛夏である。

事件は既に、その三年前から萌芽^{ほうが}していた。仙之助氏と勝治の衝突である。仙之助氏は、小柄で、上品な紳士である。若い頃には、かなりの毒舌家だったらしいが、いまは、まるで無口である。家族の者とも、日常ほとんど話をしない。用事のある時だけ、低い声で、静かに言う。むだ口は、言うのも聞くのも、きらいなようである。煙草は吸うが、酒は飲まない。アトリエと旅行。仙之助氏の生活の場所は、その二つだけのように見えた。けれども画壇の一部に於いては、鶴見はいつも金庫の傍で暮している、という奇妙な囁^{ささや}きも交^かわされているらしく、とすると仙之助氏の生活の場所も合計三つになるわけであるが、そのような囁きは、貧困

で自堕落な画家の間にだけでもつばら流行している様子で、れいのヒステリーの復讐的な嘲笑に過ぎないらしいところもあるので、そのまま信用する事も出来ない。とにかく世間一般は、仙之助氏を相当に尊敬していた。

勝治は父に似ず、からだも大きく、容貌も鈍重な感じで、そうしてやたらに怒りっぽく、芸術家の天分とでもいうようなものは、それこそ爪の垢^{あか}ほども無く、幼い頃から、ひどく犬が好きで、中学校の頃には、闘犬を二匹も養っていた事があった。強い犬が好きだった。犬に飽^あきて来たら、こんどは自分で拳闘に凝^こり出した。中学で二度も落第して、やっと卒業した春に、父と乱暴な衝突をした。父はそれまで、勝治の事に就^ついては、ほとんど放任してい

るように見えた。母だけが、勝治の将来に就いて気をもんでいるように見えた。けれども、こんど、勝治の卒業を機として、父が勝治にどんな生活方針を望んでいたのか、その全部が露呈せられた。まあ、普通の暮しである。けれども、少し頑固すぎたようでもある。医者になれ、というのである。そうして、その他のものは絶対にいけない。医者に限る。最も容易に入学できる医者の学校を選んで、その学校へ、二度でも三度でも、入学できるまで受験を続けよ、それが勝治の最善の路だ、理由は言わぬが、あとになつて必ず思い当る事がある、と母を通じて勝治に宣告した。これに対して勝治の希望は、あまりにも、かけ離れていた。

勝治は、チベットへ行きたかったのだ。なぜ、そのような冒険

を思いついたか、或いは少年航空雑誌で何か読んで強烈な感激を味つたのか、はつきりしないが、とにかく、チベットへ行くのだという希望だけは牢固ろうことして抜くべからざるものがあつた。両者の意嚮いこうの間には、あまりにもひどい懸隔けんかくがあるので、母は狼狽ろうばいした。チベットは、いかになんでも唐突すぎる。母はまず勝治に、その無思慮な希望を放棄してくれるように歎願した。頑として聞かない。チベットへ行くのは僕の年来の理想であつて、中学時代に学業よりも主として身体の鍛錬たんれんに努めて来たのも実はこのチベット行のためにそなえていたのだ、人間は自分の最高と信じた路に雄飛しなければ、生きていても屍同然しかばねである、お母さん、人間はいつか必ず死ぬものです、自分の好きな路に進んで、

努力してそうして中途でたおれたとて、僕は本望です、と大きい男がからだを震わせ、熱い涙を流して言い張る有様には、さすがに少年の純粋な一すじの情熱も感じられて、可憐でさえあつた。母は当惑するばかりである。いまはもう、いつそ、母のほうで、そのチベツトとやらの十万億土へ行つてしまいたい氣持である。どのように言つてみても、勝治は初志をひるがえさず、ひるがえすどころか、いよいよ自己の悲壯の決意を固めるばかりである。母は窮した。まっくらな氣持で、父に報告した。けれども流石に、さすがチベツトとは言い出し兼ねた。満洲へ行きたいそうでございますが、と父に告げた。父は表情を変えずに、少し考えた。答は、実に案外であつた。

「行ったらいいだろう。」

そう言つてパレットを持ち直し、

「満洲にも医学校はある。」

これでは問題が、更にややこしくなつたばかりで、なんにもならない。母は今更、チベットとは言い直しかねた。そのまま引きさがつて、勝治に向い、チベットは諦めて、せめて満洲の医学校、くらいのところで堪^{かん}忍^{にん}してくれぬか、といまは必死の説服に努めてみたが、勝治は風馬牛^{ふうばぎゅう}である。ふんと笑つて、満洲なら、クラスの相馬君も、それから辰ちゃんだつて行くと言つてた、満洲なんて、あんなへナチヨコどもが行くのにちょうどよい所だ、神秘性が無いじゃないか、僕はなんでもチベットへ行くのだ、日

本で最初の開拓者になるのだ、羊を一万頭も飼って、それから、などと幼い空想をとりとめもなく言い続ける。母は泣いた。

とうとう、父の耳にはいった。父は薄笑いして、勝治の目前で静かに言い渡した。

「低能だ。」

「なんだっていい、僕は行くんだ。」

「行つたほうがよい。歩いて行くのか。」

「ばかにするな！」勝治は父に飛びかかつて行つた。これが親不孝のはじめ。

チベツト行は、うやむやになつたが、勝治は以来、恐るべき家庭破壊者として、そろそろ、その兇きようあく悪な風格を表しはじめた。

医者の学校へ受験したのか、しないのか、（勝治は受験したと言っている）また、次の受験にそなえて勉強しているのか、どうか、（勝治は、勉強しているさ、と言っている）まるで当てにならない。勝治の言葉を信じかねて、食事の時、母がうつかり、「本当？」と口を滑らせたばかりに、ざぶりと味噌汁みそしるを頭から浴びせられた。

「ひどいわ。」朗らかに笑って言って素早く母の髪をエプロンで拭いてやり、なんでもないようにその場を取りつくろってくれたのは、妹の節子である。未だ女学生である。この頃から、節子の稀有けうの性格が登場する。

勝治の小使銭は一月三十円、節子は十五円、それは毎月きまつ

て母から支給せられる額である。勝治には、足りるわけがない。

一日で無くなる事もある。何に使うのか、それは後でだんだんわかつて来るのであるが、勝治は、はじめは、「わかつてるじやねえか、必要な本があるんだよ」と言っていた。小使銭を支給されたその日に、勝治はぬつと節子に右手を差し出す。節子は、うなずいて、兄の大きい掌に自分の十円紙幣を載せてやる。それだけで手を引込める事もあるが、なおも黙って手を差し出したままにいる事もある。節子は一瞬泣きべそに似た表情をするが、無理に笑って、残りの五円紙幣をも勝治の掌に載せてやる。

「サアンキュ！」勝治はそう言う。節子のお小使は一銭も残らぬ。節子は、その日から、やりくりをしなければならぬ。どうしても、

やりくりのつかなくなつた時には、仕方が無い、顔を真赤にして母にたのむ。母は言う。

「勝治ばかりか、お前まで、そんなに金使いが荒くては。」

節子は弁解をしない。

「大丈夫。来月は、だいじょうぶ。」と無邪気な口調で言う。

その頃は、まだよかつたのだ。節子の着物が無くなりはじめた。

いつのまにやら箆^{たんす}箆^{たんす}から、すつと姿を消している。はじめ、まだ

一度も袖を^{そで}とおさぬ訪問着が、すつと無くなつてゐるのに氣附い

た時には、さすがに節子も顔色を変えた。母に尋ねた。母は落ち

ついて、着物がひとりで出歩くものか、捜してごらん、と言つた。

節子は、でも、と言いかけて口を噤^{つぶ}んだ。廊下に立っている勝治

を見たのだ。兄は、ちらと節子に目くばせをした。いやな感じだった。節子は再び箆笥を捜して、

「あら、あつたわ。」と言った。

二人きりになった時、節子は兄に小声で尋ねた。

「売っちゃったの？」

「わしや知らん。」タララ、タ、タタタ、廊下でタツプ・ダンスの稽古けいこをして、「返さない男じゃねえよ。我慢しろよ。ちよつとの間じゃねえか。」

「きつとね？」

「あさましい顔をするなよ。告げ口したら、ぶん殴なぐる。」

悪びれた様子もなかった。節子は、兄を信じた。その訪問着は、

とうとうかえつて来なかった。その訪問着だけでなく、その後も着物が二枚三枚、箆笥から消えて行くのだ。節子は、女の子である。着物を、皮膚と同様に愛惜している。その着物が、すつと姿を消しているのを発見する度毎に、ろっこつ肋骨を一本失ったみたいな堪えがたい心細さを覚える。生きてかい甲斐ない氣持がする。けれどもいまは、兄を信じて待っているより他は無い。あくまでも、兄を信じようと思った。

「売っちゃ、いやよ。」それでも時々、心細さのあまり、そつと勝治にささや囁くことがある。

「馬鹿野郎。おれを信用しねえのか。」

「信用するわ。」

信用するより他はない。節子には、着物を失った淋しさの他に、もし此この事が母に勘かんづ附つかれたらどうしようという恐ろしい不安もあつた。二、三度、母に対して苦しい言いのがれをした事もあつた。

「矢やがすり絢めいせんの銘仙があつたじゃないか。あれを着たら、どうだい？」

「いいわよ、いいわよ。これでいいの。」心の内は生死の境だ。危機一髪である。

姿を消した自分の着物が、どんなところへ持ち込まれているのか、少しずつ節子にもわかつて来た。質屋というものの存在、機構を知ったのだ。どうしてもその着物を母のお目に掛けなければ

ならぬ窮地におちいった時には、苦心してお金を都合して兄に手渡す。勝治は、オーライなどと言って、のっそり家を出る。着物を抱^かえてすぐに帰って来る事もあれば、深夜、酔って帰って来て、「すまねえ」なんて言って、けろりとしていることもある。後になつて、節子は、兄に教わつて、ひとりで質屋へ着物を受け出しに行くようにさえなつた。お金がどうしても都合できず、他の着物を風呂敷に包んで持つて行つて、質屋の倉庫にある必要な着物と交換してもらふ術なども覚えた。

勝治は父の画を盗んだ。それは、あきらかに勝治の所業であつた。その画は小さいスケッチ版ではあつたが、父の最近の佳作の一つであつた。父の北海道旅行の収穫である。およそ二十枚くら

い画いて来たのだが、仙之助氏には、その中でもこの小さい雪景色の画だけが、ちよつと氣にいつていたので、他の二十枚程の画は、すぐに画商に手渡しても、その一枚だけは手許に残して、アトリエの壁に掛けて置いた。勝治は平氣でそれを持ち出した。捨て値でも、百円以上には、売れた筈^{はず}である。

「勝治、画はどうした。」二、三日経つて、夕食の時、父がポツンと言つた。わかつていたらしい。

「なんですか。」平然と反問する。みじんも狼狽^{ろうばい}の影が無い。

「どこへ売つた。こんどだけは許す。」

「ごちそうさん。」勝治は箸^{はし}をぱちつと置いてお辞儀をした。立ち上つて隣室へ行き、うたはトチチリチン、と歌つた。父は顔色

を変えて立ち上りかけた。

「お父さん！」節子はおさえた。「誤解だわ、誤解だわ。」

「誤解？」父は節子の顔を見た。「お前、知ってるのか。」

「え、いいえ。」節子には、具体的な事は、わからなかった。けれども、およその見当はついた。「私が、お友達にあげちやったの。そのお友達は、永いこと病気なの。だから、ね、——」やっぱり、しどろもどろになってしまった。

「そうか。」父には勿論、その嘘がわかつていた。^{うそ}けれども節子の懸命な声に負けた。「わるい奴だ。」と誰にともなく言つて、また食事をつづけた。節子は泣いた。母も、うなだれていた。

節子には、兄の生活内容が、ほぼ、わかつて来た。兄には、わ

るい仲間がいた。たくさんの仲間のうち、特に親しくしているのが三人あつた。

風間七郎。この人は、大物であつた。勝治は、その受験勉強の期間中、仮にT大学の予科に籍を置いていたが、風間七郎は、そのT大学の予科の謂^いわば主^{ぬし}であつた。年齢もかれこれ三十歳に近い。背広を着ていることの方が多かつた。額^{ひたい}の狭い、眼のくぼんだ、口の大きい、いかにも精力的な顔をしていた。風間という勅選議員の甥^{おい}だそうだが、あてにならない。ほとんど職業的な悪漢である。言う事が、うまい。

「チルチル（鶴見勝治の愛称である）もうそろそろ足を洗ったらどうだ。鶴見画伯のお坊ちゃんが、こんな工合いじゃ、いたまし

くて仕様が無い。おれたちに遠慮は要らないぜ。」思案深げに、しんみり言う。

チルチルなるもの、感奮一番せざるを得ない。水臭いな、親爺おやじは親爺、おれはおれさ、ザマちゃん（風間七郎の愛称である）お前ひとりを死なせないぜ、なぞという馬鹿な事を言つて、更に更に風間とその一党に対して忠誠を誓うのである。

風間は真面目な顔をして勝治の家庭にまで乗り込んで来る。すこぶ頗る礼儀正しい。目当は節子だ。めあて節子は未だ女学生であつたが、なりも大きく、顔は兄に似ず端麗たんれいであつた。節子は兄の部屋へ紅茶を持って行く。風間は真白い歯を出して笑つて、コンチワ、と言う。すがすがしい感じだつた。

「こない家庭にいて、君、」と隣室へさがって行く節子に聞える程度の高い声で、「勉強しないって法は無いね。こんど僕は、ノオトを都合してやるから勉強し給え。」と言う。

勝治は、にやにや笑っている。

「本当だぜ！」風間は、ぴしりと言う。

勝治は、あわてふためき、

「うん、まあ、うん、やるよ。」と言う。

鈍感な勝治にも、少しは察しがついて来た。節子を風間に取りもってやるような危険な態度を表しはじめた。みつぎものとして、差し上げようという考えらしい。風間がやって来ると用事も無いのに節子を部屋に呼んで、自分はそつと座はずす。馬鹿げた事だ。

夜おそく、風間を停留場まで送らせたり、新宿の風間のアパートへ、用も無い教科書などをとどけさせたりする。節子は、いつも兄の命令に従った。兄の言に依れば、風間は、お金持のお坊ちやんで秀才で、人格の高潔な人だという。兄の言葉を信じるより他はない。事実、節子は、風間をたよりにしていたのである。

アパートへ教科書をとどけに行った時、

「や、ありがとう。休んでいらっしやい。コーヒーをいれましよう。」気軽な応対だった。

節子は、ドアの外に立ったまま、

「風間さん、私たちをお助け下さい。」あさましいまでに、祈りの表情になっていた。

風間は興覚めた。よそうと思った。

さらに一人。杉浦透馬。これは勝治にとって、最も苦手にがての友人だった。けれども、どうしても離れる事が出来なかった。そのよ
うな交友関係は人生にままある。けれども杉浦と勝治の交友ほど
滑稽で、無意味なものも珍しいのである。杉浦透馬は、苦学生で
ある。T大学の夜間部にかよっていた。マルキシストである。実
際かどうか、それは、わからぬが、とにかく、当人は、だいぶ凄すご
い事を言っていた。その杉浦透馬に、勝治は見込まれてしまった
というわけである。

生来、理論の不得意な勝治は、ただ、閉口するばかりである。
けれども勝治は、杉浦透馬を拒否する事は、どうしても出来なか

った。謂わば蛇に見込まれた蛙へびの形で、這かえるいつくばったきりで身動きも何も出来ないのである。あまりいい図ではなかった。この事に就いては、三つの原因が考えられる。生活に於いて何不足なく、ゆたかに育った青年は、極貧の家に生れて何もかも自力で処理して立っている青年を、ほとんど本能的に畏怖しているものである。次に考えられるのは、杉浦透馬が酒も煙草もいっさい口にしないという点である。勝治は、酒、煙草は勿論の事、すでに童貞をさえ失っていた。放ほうじゅう縦な生活をしている者は、かならずストイックな生活にあこがれている。そうして、ストイックな生活をしている人を、けむったく思いながらも、拒否できず、おっかなびつくり、やたらに自分を卑下してだらだら交際を続けている

るものである。三つには、杉浦透馬に見込まれたという自負である。見込まれて狼狽閉口していながらも、杉浦君のような高潔な闘士に、「鶴見君は有望だ」と言われると、内心まんざらでないところもあつたのである。何がどう有望なのか、勝治には、わけがわからなかつたのであるが、とにかく、今の勝治を、まじめにほめてくれる友人は、この杉浦透馬ひとりしか無いのである。この杉浦にさえ見はなされたら、ずいぶん淋しい事になるだろうと思えば、いよいよ杉浦から離れられなくなるのである。杉浦は実に能弁の人であつた。トランクなどをさげて、夜おそく勝治の家の玄関に現れ、「どうも、また、僕の身辺が危険になつて来たよ」うだ。誰かに尾行びこうされているような気もするから、君、ちよつと、

家のまわりを探ってみて来てくれないか。」と声をひそめて言う。勝治は緊張して、そつと庭のほうから外へ出て家のぐるりを見廻り、「異状ないようです。」と小声で報告する。「そうか、ありがとう。もう僕も、今夜かぎりで君と逢^あえないかも知れませんが、けれども一身の危険よりも僕にはプロパガンダのほうが重大事です。逮捕される一瞬前まで、僕はプロパガンダを怠^{おろそ}かする事が出来ない。」やはり低い声で、けれども一語の遅滞^{ちた}もなく、滔^{とう}滔^{とう}と述べはじめ。勝治は、酒を飲みたくてたまらない。けれども、杉浦の真剣な態度が、なんだかこわい。あくびを噛^かみ殺して、「然^{しか}り、然り」などと言っている。杉浦は泊って行く事もある。外へ出ると危険だというのだから、仕様が無い。帰る時には、党の費

用だといって、十円、二十円を請求する。泣きの涙で手渡してやると、「ダンケ」と言つて歸つて行く。

さらに一人、実に奇妙な友人がいた。有原修作。三十歳を少し越えていた。新進作家だという事である。あまり聞かない名前であるが、とにかく、新進作家だそうである。勝治は、この有原を「先生」と呼んでいた。風間七郎から紹介されて相知つたのである。風間たちが有原を「先生」と呼んでいたのも、勝治も真似をして「先生」と呼んでいただけの話である。勝治には、小説界の事は、何もわからぬ。風間たちが、有原を天才だと言つて、一目置いている様子であつたから、勝治もまた有原を人種のちがつた特別の人として大事に取扱つていたのである。有原は不思議なく

らい美しい顔をしていた。からだつきも、すらりとして気品があった。薄化粧よそおしている事もある。酒はいくらでも飲むが、女には無関心なふうを装よそおっていた。どんな生活をしているのか、住所は絶えず変つて、一定していないようであつた。この男が、どういふわけか、勝治を傍にひきつけて離さない。王様が黒人の力士を養つて、退屈な時のなぐさみものはなはにしているような図と甚だ似ていた。

「チルチルは、ピタゴラスの定理つて奴を知つてるかい。」

「知りません。」勝治は、少ししよげる。

「君は、知っているんだ。言葉で言えないだけなんだ。」

「そうですね。」勝治は、ほっとする。

「そうだろう？ 定理つてのは皆そんなものなんだ。」

「そうでしょうか。」お追ついで 従したが笑いなどをして、有原の美しい顔を、ほればれと見上げる。

勝治に圧倒的な命令を下して、仙之助氏の画を盗み出させたのも、こいつだ。ほんもく 本牧に連れていって勝治に置いてきぼりを食ら

わせたのも、こいつだ。勝治がぐっすり眠っている間に、有原はさっさとひとりで帰ってしまったのである。勝治は翌る日、勘かんじ

よう 定の支払いに非常な苦心をした。おまけにその一夜のために、

始末のわるい病気にまでかかった。忘れようとしても、忘れる事が出来ない。けれども勝治は、有原から離れる事が出来ない。有原には、へんなプライドみたいなものがあつて、決してよその家

庭には遊びに行かない。たいてい電話で勝治を呼び出す。

「新宿駅で待つてるよ。」

「はい。すぐ行きます。」やっぱり出掛ける。

勝治の出費は、かさむばかりである。ついには、女中の松やの貯金まで強奪するようにさえなつた。台所の隅で、松やはその事をお嬢さんの節子に訴えた。節子は自分の耳を疑つた。

「何を言うのよ。」かえつて松やを、ぶつてやりたかつた。「兄さんは、そんな人じゃないわ。」

「はい。」松やは奇妙な笑いを浮べた。はたちを過ぎている。

「お金はどうでも、よござんすけど、約束、——」

「約束？」なぜだか、からだが震えて来た。

「はい。」小声で言つて眼を伏せた。

ぞつとした。

「松や、私は、こわい。」節子は立つたままで泣き出した。

松やは、氣の毒そうに節子を見て、

「大丈夫でございます。松やは、旦那様にも奥様にも申し上げませぬ。お嬢様おひとり、胸にたた疊んで置いて下さいまし。」

松やも犠牲者のひとりであつた。強奪せられたのは、貯金だけではなかつたのだ。

勝治だつて、苦しいに違いない。けれども、この小暴君は、詫びるという法を知らなかつた。詫びるというのは、むしろ大いに卑怯な事だと思つていたようである。自分で失敗をやらかす度毎

に、かえって、やたらに怒るのである。そうして、怒られる役は、いつでも節子だ。

或る日、勝治は、父のアトリエに呼ばれた。

「たのむ！」仙之助氏は荒い呼吸をしながら、「画を持ち出さないでくれ！」

アトリエの隅に、うず高く積まれてある書き損じの画の中から、割合い完成せられてある画を選び出して、二枚、三枚と勝治は持ち出していたのである。

「僕がどんな人だか、君は知っているのですか？」父はこのごろ、わが子の勝治に対して、へんに他人行儀のものの言いかたをするようになっていた。「僕は自分を、一流の芸術家のつもりでいる

のだ。あんな書き損じの画が一枚でも市場に出たら、どんな結果になるか、君は知っていますか？ 僕は芸術家です。名前が惜しいのです。たのむ。もう、いい加減にやめてくれ！」声をふるわせて言っている仙之助氏の顔は、冷い青い鬼のように見えた。さすがの勝治もからだが竦んだ。

「もう致しません。」うつむいて、涙を落した。

「言いたくない事も言わなければいけません、」父は静かな口調にかえって、そつと立ち上り、アトリエの大きい窓をあけた。

すでに初夏である。「松やを、どうするのですか？」

勝治は仰天した。小さい眼をむき出して父を見つめるばかりで、言葉が出なかった。

「お金をかえして、」父は庭の新緑を眺めながら、「ひまを出します。結婚の約束をしたそうですが、」幽かすかに笑って、「まさか君も、本気で約束したわけじゃあないでしょう？」

「誰が言っただんです！ 誰が！」矢庭やにわに勝治は、われがねの如き大声を發した。「ちくしょう！」どんと床を蹴けって、「節子だな？ 裏切りやがって、ちくしょうめ！」

恥ずかしさが極点に達すると勝治はいつも狂ったみたいに怒るのである。怒られる相手は、きまって節子だ。風の如くアトリエを飛び出し、ちくしょうめ！ ちくしょうめ！ を連発しながら節子を搜し廻り、茶の間で見つけて滅茶苦茶なぐにぶん殴った。

「ごめんなさい、兄さん、ごめん。」節子が告げ口したのではな

い。父がひとりで、いつのまにやら調べあげていたのだ。

「馬鹿にしていやあがる。ちくしょうめ！」引きずり廻して蹴たおして、自分もめそめそ泣き出して、「馬鹿にするな！ 馬鹿にするな！ 兄さんは、な、こう見えたって、人から奢おごられた事なんかただの一度だつてねえんだ。」意外な自慢を口走った。ひとに遊興費を支払わせたことが一度も無いというのが、この男の生涯に於ける唯一の必死のプライドだったとは、あわれな話であった。

松やは解雇せられた。勝治の立場は、いよいよ、まずいものになった。勝治は、ほとんど家にいつかなかった。二晩も三晩も、家に帰らない事は、珍らしくなかった。麻雀賭博マーじゃんとはくで、二度も

警察に留置せられた。喧嘩けんかして、衣服を血だらけにして帰宅する事も時々あった。節子の箆たんすに目ぼしい着物がなくなつたと見るや、こんどは母のこまごました装身具を片端から売払つた。父の印鑑を持ち出して、いつの間にやら家の電話を抵当ていとうにして金を借りていた。月末になると、近所の蕎麦屋そば、寿司屋すし、小料理屋などから、かなり高額の勘定書がとどけられた。一家の空気は険悪になるばかりであつた。このままでこの家庭が、平静に帰するわけはなかつた。何か事件が、起らざるを得なくなつていた。

真夏に、東京郊外の、井の頭公園いのかしらで、それが起つた。その日のことは、少しくわしく書きしるさなければならぬ。朝早く、節子に電話がかかつて来た。節子は、ちらと不吉なものを感じた。

「節子さんでございますか。」女の声である。

「はい。」少し、ほっとした。

「ちよつとお待ち下さい。」

「はあ。」また、不安になった。

しばらくして、

「節子かい。」と男の太い声。

やっぱり勝治である。勝治は三日ほど前に家を出て、それつきりだったのである。

「兄さんが牢へはいってもいいかい？」突然そんな事を言った。

「懲^{ちようえき}役五年だぜ。こんどは困ったよ。たのむ。二百円あれば、たすかるんだ。わけは後で話す。兄さんも、改心したんだ。本当

だ。改心したんだ、改心したんだ。最後の願いだ。一生の願いだ。二百円あれば、たすかるんだ。なんとかして、きょうのうちに持つて来てくれ。井の頭公園の、な、御殿山の、宝亭というところにいるんだ。すぐわかるよ。二百円できなければ、百円でも、七十円でも、な、きょうのうちに、たのむ。待つてるぜ。兄さんは、死ぬかも知れない。「酔っているようであつたが、語調には切々たるものが在った。節子は、震えた。

二百円。出来るわけはなかった。けれども、なんとかして作つてやりたかつた。もう一度、兄を信頼したかつた。これが最後だ、と兄さんも言っている。兄さんは、死ぬかも知れないのだ。兄さんは、可哀^{かわい}そうなひとだ。根からの悪人ではない。悪い仲間^{仲間}にひ

きずられているのだ。私はもう一度、兄さんを信じたい。

箆筒を調べ、押入れに頭をつつこんで捜してみても、お金になりそうな品物は、もはや一つも無かった。思い余って、母に打ち明け、懇願した。

母は驚愕きょうがくした。

ひきとめる節子をつきとばし、思慮を失った者の如く、ああと叫びながら父のアトリエに駆け込み、ぺたりと板の間に坐まった。父の画伯は、画筆を捨てて立ち上った。

「なんだ。」

母はどもりながらも電話の内容の一切を告げた。聞き終った父は、しゃがんで画筆を拾い上げ、再び画布の前に腰をおろして、「お前たちも、馬鹿だ。あの男の事は、あの男ひとりに始末させ

たらしい。懲役なんて、嘘うそです。」

母は、顔を伏せて退出した。

夕方まで、家の中には、重苦しい沈黙が続いた。電話も、あれつきりかかって来ない。節子には、それがかえって不安であつた。堪えかねて、母に言つた。

「お母さん！」小さい声だつたけれど、その呼び掛けは母の胸を突き刺した。

母は、うろうろしはじめた。

「改心すると言つたのだね？　きつと、改心すると、そう言つたのだね？」

母は小さく折り畳んだ百円紙幣を節子に手渡した。

「行つておくれ。」

節子はうなずいて身支度をはじめた。節子はそのとしの春に、女学校を卒業していた。粗末なワンピースを着て、少しお化粧して、こつそり家を出た。

井の頭。もう日が暮れかけていた。公園にはいると、カナカナ蝉ぜみの聲が、降るようだった。御殿山。宝亭は、すぐにわかった。料亭と旅館を兼ねた家であつて、老杉に囲まれ、古びて堂々たる構えであつた。出て来た女中に、鶴見がいますか、妹が来たと申し伝えて下さい、と怯おじずに言った。やがて廊下に、どたばた足音がして、

「や、図星なり、図星なり。」勝治の大きな声が聞えた。ひどく

酔っているらしい。「白状すれば、妹には非ず。恋人なり。」ま
ずい冗談である。

節子は、あさましく思った。このまま帰ろうかと思った。

ランニングシャツにパンツという姿で、女中の肩にしなだれか
かりながら勝治は玄関にあらわれた。

「よう、わが恋人。逢^あいたかった。いざ、まず。いざ、まず。」

なんという不器用な、しつっこいお芝居なんだろう。節子は顔
を赤くして、そうして仕方なしに笑った。靴を脱ぎながら、堪え
られぬ迄^{まで}に悲しかった。こんどもまた、兄に、だまされてしまっ
たのではなからうかと、ふと思った。

けれども二人ならんで廊下を歩きながら、

「持つて来たか。」と小声で言われて、すぐに、れいの紙幣を手渡した。

「一枚か。」兇暴な表情に変わった。

「ええ。」声を出して泣きたくなつた。

「仕様がねえ。」太い溜息をついて、「ま、なんとかしよう。節子、きようはゆっくりして行けよ。泊って行ってもいいぜ。淋しいんだ。」

勝治の部屋は、それこそ杯盤狼藉はいばんろうぜきだった。隅に男がひとりいた。節子は立ちすくんだ。

「メツチエンの来訪です。わが愛人。」と勝治はその男に言った。「妹さんだろう？」相手の男は勘がよかった。有原である。「僕

は、失敬しよう。」

「いいじゃないですか。もつとビールを飲んで下さい。いいじゃないですか。軍資金は、たっぷりです。あ、ちよつと失礼。」勝治は、れいの紙幣を右手に握ったままで姿を消した。

節子は、壁際に、からだを固くして坐った。節子は知りたかった。兄がいったい、どのような危い瀬戸際に立っているのか、それを聞かぬうちは帰られないと思っていた。有原は、節子を見無視して、黙ってビールを飲んでゐる。

「何か、」節子は、意を決して尋ねた。「起つたのでしょうか。」
「え？」振り向いて、「知りません。」平然たるものだった。

しばらくして、

「あ、そうですか。」うなずいて、「そう言えば、きょうのチルチルは少し様子が違いますね。僕は、本当に、何もわからんです。この家は、僕たちがちよいちよい遊びにやって来るところなのですが、さつき僕がふらとここへ立ち寄ったら、かれはひとりでもうひどく酔っぱらっていたのです。二、三日前からここに泊り込んでいたらしいですね。僕は、きょうは、偶然だったのです。本当に、何も知らないのです。でも、何かあるようですね。」にこりともせず、落ちつき払ってそういう言葉には、嘘があるようにも思えなかった。

「やあ、失敬、失敬。」勝治は帰って来た。れいの紙幣が、もう右手に無いのを見て、節子には何か、わかったような気がした。

「兄さん！」いい顔は、出来なかった。「帰るわ。」

「散歩でもしてみますか。」有原は澄ました顔で立ち上った。

月夜だった。半^{はん}虧^{かけ}の月が、東の空に浮んでいた。薄い霧が、

杉林の中に充満していた。三人は、その下を縫って歩いた。勝治は、相変らずランニングシャツにパンツという姿で、月夜つてのは、つまらねえものだ、夜明けだか、夕方だか、真夜中だか、わかりやしねえ、などと^{つぶや}呟き、昔コイシ銀座ノ柳イ、と^{どな}呶鳴るようにして歌った。有原と節子は、黙ってついて歩いて行く。有原も、その夜は、勝治をれいのように^や揶^ゆ揄する事もせず、妙に考え込んで歩いていた。

老杉の陰から白い浴衣を着た小さい人が、ひよいとあらわれた。

「あ、お父さん！」節子は、戦慄せんりつした。

「へええ。」勝治も唸うなった。

「散歩だ。」父は少し笑いながら言った。それから、ちよつと有原のほうへ会釈えしやくをして、「むかしは僕たちも、よくこの辺に遊びに来たものです。久しぶりで散歩に来てみたが、昔とそんなに変わってもいないようだね。」

けれども、気まずいものだった。それつきり言葉もなく、四人は、あてもなくそろそろと歩きはじめた。沼のほとりに来た。数日前の雨のために、沼の水量は増していた。水面はコールタールみたいに黒く光って、波一つ立たずひっそりと静まりかえっている。岸にボートが一つ乗り捨てられてあつた。

「乗ろう！」勝治は、わめいた。てれかくしに似ていた。「先生、乗ろう！」

「ごめんだ。」有原は、沈んだ声で断った。

「ようし、それでは拙者^{せつしゃ}がひとりで。」と言いなながら危い足どりでその舟に乗り込み、「ちやんとオールもございます。沼をいまわりして来るぜ。」騎虎^{きこ}の勢^{いきお}いである。

「僕も乗ろう。」動きはじめたボートに、ひらりと父が飛び乗った。

「光栄です。」と勝治が言つて、ピチャとオールで水面をたたいた。すつとボートが岸をはなれた。また、ピチャとオールの音。

舟はするする滑つて、そのまま小島の陰の暗闇に吸い込まれて行

った。トトサン、御無事デ、エエ、マタア、カカサンモ。勝治の酔いどれた歌声が聞えた。

節子と有原は、ならんで水面を見つめていた。

「また兄さんに、だまされたような気が致します。七度ななたびの七十

倍、というと、——」

「四百九十回です。」だしぬけに有原が、言い継いだ。「まず、五百回です。おわびをしなければ、いけません。僕たちも悪かったのです。鶴見君を、いいおもちゃにしていました。お互い尊敬し合っていない交友は、罪悪だ。僕はお約束できると思うんだ。

鶴見君を、いい兄さんにして、あなたへお返し致します。」

信じていい、生真きまじめ面目な口調であつた。

パチャとオール音がして、舟は小島の陰からあらわれた。舟には父がひとり、するする水面を滑って、コトンと岸に突き当たった。

「兄さんは？」

「橋のところで上陸しちゃった。ひどく酔っているらしいね。」
父は静かに言って、岸に上った。「帰ろう。」

節子はうなずいた。

翌朝、勝治の死体は、橋の杣くいの間から発見せられた。

勝治の父、母、妹、みんな一応取り調べを受けた。有原も証人として召喚せられた。勝治の泥酔の果はての墜落か、または自殺か、いずれにしても、事件は簡単に片づくように見えた。けれども、

決着の土壇場に、保険会社から横槍が出た。事件の再調査を申請して来たのである。その二年前に、勝治は生命保険に加入していた。受取人は仙之助氏になっていて、額は二万円を越えていた。この事實は、仙之助氏の立場を甚だ不利にした。はなは検事局は再調査を開始した。世人はひとしく仙之助氏の無辜を信じていたし、当局でも、まさか、鶴見仙之助氏ほどの名士が、愚かな無法の罪を犯したとは思っていなかったようであるが、ひとり保険会社の態度が頗る強硬だったので、とにかく、再び、綿密な調査を開始したのである。

父、母、妹、有原、共に再び呼び出されて、こんどは警察に留置せられた。取調べの進行と共に、松やも召喚せられた。風間七

郎は、その大勢の子分と一緒に検挙せられた。杉浦透馬も、T大学の正門前で逮捕せられた。仙之助氏の陳述も乱れはじめた。事件は、意外にも複雑におそろしくなつて来たのである。けれども、この不愉快な事件の顛末てんまつを語るのが、作者の本意ではなかったのである。作者はただ、次のような一少女の不思議な言葉を、読者にお伝えしたかったのである。

節子は、誰よりも先きに、まず釈放せられた。検事は、おわかれに際して、しんみりした口調で言つた。

「それではお大事に。悪い兄さんでも、あんな死にかたをしたとなると、やっぱり肉親の情だ、君も悲しいだろうが、元気を出して。」

少女は眼を挙げて答えた。その言葉は、エホバをさえ沈思させ
たにちがいない。もちろん世界の文学にも、未だかつて出現した
ことがなかった程の新しい言葉であった。

「いいえ、」少女は眼を挙げて答えた。「兄さんが死んだので、
私たちは幸福になりました。」

青空文庫情報

底本：「太宰治全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年1月31日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：夏海

2000年4月13日公開

2005年10月31日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

花火

太宰治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>